



企画展「ちょっと昔の道具たち」

平成8年度にはじまった企画展「ちょっと昔の道具たち」は、今年度で22回目を迎えます。

本展は、小学校の社会科単元と連動した展示であり、学校団体は「今と昔の生活の違いや変化、昔の人々の生活の知恵を学ぶこと」を目的に来館されます。同時に、年配の来館者の方は、“なつかしい”道具やまちなみから、自らの体験を思い起こされるようです。

さまざまな世代の方に、当時の生活を想像し、人びとの工夫や知恵・思いを感じていただける展覧会にしていきたいと考えています。

(平成30年3月4日(日)まで開催)

加藤栄三・東一記念美術館での 26年を振り返って

分館長 熊崎勝利

加藤栄三・東一記念館（後の加藤栄三・東一記念美術館）は、「岐阜市出身で日展を中心に制作活動をつづけ、全国的に高い評価を受けている加藤栄三・東一兄弟画伯の画業を顕彰するとともに、地域の美術活動普及の充実、文化の振興に寄与すること」を目的に、1988年（S63）2月20日に岐阜市・地元財界を中心に44名からなる設立発起人会が開催され設立されました。

その後、建設予定地の発掘調査、財団法人の設立許可などの諸手続きを経て1991年（H3）5月11日、鵜飼開きの日にあわせて開館記念式典が盛大に開催されました。



開館式典であいさつする東一先生

美術館は栄三先生と東京美術学校（現東京芸大）で同期生であった吉村順三先生が設計されました。

□吉村順三（1908～1997）

文化功労者として表彰、日本芸術院会員
皇居新宮殿、国立奈良博物館、在日ノルウェー王国大使館、愛知芸術大学などを設計した日本を代表する建築家。

岐阜市で建築関係の学会・大会が開催されると当館を見学されることが多く、また建築学科の大学生が見学に訪れることも度々あります。



1993年（H5）12月21日、理事会において財団法人の解散が決議され、1994年（H6）4月1日、岐阜市に移管され「岐阜市歴史博物館分館 加藤栄三・東一記念美術館」として再出発し今日に至っています。

1991年（H3）の開館当時、記念館の運営に当たって東一先生から次のような希望を伺いました。

「栄三・東一の名前が付いた美術館だが、第1展示室は二人の作品の常設展示室とし、第2展示室は時には地元の芸術家・グループの研究作品の発表展示室として使用してはどうか。地元の芸術文化を支えているのは地元の芸術家なのだから、岐阜に拠点をおき頑張っている芸術家も大切にしたい。」

また次のようにも話されました。

「いつ来ても同じ作品が展示されている資料館のような美術館にならないように展示替えをおこなって欲しい。雪だるまは一握りの小さな雪の塊だが、転がっているうちに大きな雪だるまとなる。転がっていると泥やゴミ屑を拾い汚れることもあるが、動かずにいたら融けてしまうよ。」

そんな東一先生の意思に沿って、第1展示室は栄三・東一兄弟画伯の常設展示室として約3ヶ月毎にテーマを決め展示替えを行い、第2展示室は岐阜ゆかりの芸術家・グループの作品発表の場として開放し、約1ヶ月半毎に展示替えを行ってきました。

開館以来26年間で、第1展示室では栄三・東一の画業を紹介する展示を121回、第2展示室で芸術家個人の展覧会を78回、芸術家グループの展覧会を67回開催してきました。

ふるさと岐阜を拠点に積極的に芸術活動を行い全国にその成果を発信しているにもかかわらず、身近なゆえにその活動を正に評価しない風潮が地元にあるように感じます。地元の芸術文化は地元の芸術家が支えていることを大切にしたいという思いで運営してきました。

また、芸術家が死去するとその活動が歴史の中に埋没し忘れ去られてしまうことが多くあります。そのような芸術家を掘り起こし、その業績を残しておくのも地域に密着した美術館としての役割ではないかと思っています。

開館記念展で栄三作「雷神」と、「兄貴が生きていればきっと描いたであろう」と栄三の三回忌にあわせて描いた東一作「風神」を初めて同時公開しました。そして、この「雷神」「風神」を周年記念展毎に再会させたいという希望をもっていました。借用が難しくなり再び同時公開することができなかったことは残念でなりません。

第2展示室では、岐阜ゆかりの芸術家の企画展を開催しましたが、その中でも俳優の「榎木孝明展」。岐阜市出身で「ハチ公物語」「ふるさと」「郡上一揆」などを制作した社会派映画監督の「神山征二郎の世界展」。

岐阜市出身の漫画家で離島医療の現場や人々の優しさといったヒューマンストーリーを描いた「Dr. コトー診療所 山田貴敏 原画展」は開催にこぎつけるまで苦労しましたが印象に残っています。



当館は栄三・東一先生のご遺族より素描・下絵・本画（完成作品）などを多くご寄贈いただき、日本画の制作過程が系統的に検証できるといふ他の美術館では見られない特徴があります。両画伯がいかにモチーフと対峙し、試行錯誤を繰り返しながら制作を行ったかを知ることができるユニークな美術館としての特徴を生かすことが大切だと思います。



小下絵 大下絵 本画
「並木道」 東一

また、栄三・東一両画伯は、「素描の達人」「素描の名手」として多くの美術関係者から高い評価をうけていました。豊かな、しかも鋭敏な色彩への感受性に恵まれていた二人は、軽妙で洒脱な素描を鉛筆、パステル、コンテなど多くの素材を使って描きましたが、日本画家の独自の筆さばきによる筆の魔術は、長年の修練と恵まれた資質とによって可能となるのでしょうか。

収蔵作品の中には未公開の素描が多くあります。裏打ち、額装など展示できるように整理しなければなりません。素描のもつ醍醐味を味わっていただける美術館としても今後の展示に期待できると思います。

戦後の日本画壇をリードしてきた加藤栄三・東一先生の業績を後世にまで残すとともに、岐阜にゆかりの芸術家の活躍ぶりを発信する基地として充実した企画展を期待し見守ってゆきたいと思っています。

高齢化社会を迎え、何を心の支えとして生きるかが問われるなかで、心のよりどころとしての芸術の役割は益々大きくなると思います。心にゆとりと潤いをあたえる美術館となることを期待します。

企画展

ちょっと昔の道具たち

2017.12.13(水)～2018.3.4(日)

今年で22回目を迎える展覧会。本展は、小学校3年生の社会科単元「古い道具とむかしの暮らし」と連携し、今と昔の生活の違いや変化、昔の人々の生活の知恵を紹介します。また、「具体物を通して」学習する場を提供し、体験やジオラマ方式の展示形式で、「見て・聞いて・触れて楽しく」学ぶことを目的としています。また会場内には、20代～90代と、さまざまな世代のものしり博士が各コーナーで解説や体験補助を行っており、毎年ご好評をいただいています。

展示コーナーでは、「学校」「まちかど」「家のなか」「家のまわり」があり、いずれも児童の生活に関連した4場面を設定しています。「学校」「家のなか」は80～60年くらい前、「まちかど」「家のまわり」は60～40年くらい前の時代設定とし、ジオラマ形式に資料を展示することで、当時の様子が理解しやすいよう配慮しています。このほかに、様々な道具の変遷をたどれる「道具のうつりかわり」があります。

本展では、展示内容や見学方法等について、岐阜市小学校社会科研究会の先生方と開催する博学連携委員会において協議するとともに、来館者アンケートも参考にしながら毎年見直しを行っています。

本年は、昨年度から開始した「思い出の写真コーナー」にディスプレイ表示を追加し、写真募集を継続します。写真は、昭和20年代～50年代初めごろ、岐阜市近辺で撮影されたものを主な対象とし、博物館への持参を原則としています。また写真原本は返却します。会期中は随時、お持ちの写真のご提供を受け付けていますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。



思い出の写真コーナー



お手玉大会のようす

なお、土曜・日曜・祝日には「おもちゃ作り教室」、「ものしり博士のわくわくワークショップ」、お手玉大会など、各種のイベントがあります。世代ごとに様々な見方が味わえる「ちょっと昔」を、ぜひご家族でお楽しみください。

【関連行事】

<一般来館者向け>

○昔のおもちゃ作り教室

(各日 午前11時～・午後2時～)

1月7日(日)「羽子板ストラップ」[300円]・14日(日)「親子でチャレンジ!布で作る小花のストラップ」[800円]・28日(日)「うぐいす笛」[200円]・2月4日(日)「親子でチャレンジ!布で作る富有柿」[700円]・11日(日)「my おひなさま」[200円]・3月4日(日)「都どり」[500円]

※[]は材料費、各回定員先着20名(「親子でチャレンジ!布で作る小花のストラップ」と「親子でチャレンジ!布で作る富有柿」は各回先着10名)、開始30分前より整理券を配布します。

○ものしり博士のわくわくワークショップ

(土曜日 午前10時～12時と午後1時～3時)

12月23日、1月6日・13日・20日・27日、2月3日・10日・24日、3月3日

○みんなあつまれ!お手玉大会

2月25日(日) 午後1時30分～

○糸つむぎ&綿くり体験

2月3日・10日・24日の各土曜日午後1時～3時

○ものしり博士のわくわくコマ教室

2月17日(土) 午前10時～12時と午後1時～3時

※展覧会観覧者は当日自由にご参加いただけます。

<学校団体向け>

■たぬきの糸車 SPESICAL DAYS

2月1日(木)・2日(金)・15日(木)・16日(金)

※都合により内容・時間等が変更になる場合があります。

企画展

タイムスリップ！ 大むかしのくらし

2018. 3.27(火)～ 5.20(日)

この展覧会は、平成19年に、小学校6年生のための体験型ミニ展覧会として始まり、形を変えながら今回で11年目を数えます。この展覧会は、歴史を初めて学ぶ子どもたちが抵抗なく歴史の世界に入っていけるように、さまざまな工夫を凝らしています。展示では、原始・古代の生活のなかで使われるさまざまな道具を復元し、それらを使う体験コーナーを展示の中心にしています。体験コーナーでは、歴博ボランティアの皆さんに子どもたちへの説明と体験補助を担当していただき、当時の人々の知恵と技術を実際に体験することで、社会の様子や時代背景の理解を助けています。遺跡から出土した資料の展示とあわせ、大むかしの人々のくらしを肌で感じることで、学校に戻ってからより学習内容に親しみやすく、歴史を身近に感じられることでしょう。展示資料とともに体験コーナーを通して、子どもも大人も楽しみながら学べる展覧会です。

本年は、古墳時代の体験を増やします。これまでの展示では、古墳から出土した様々な副葬品を中心に展示し、それらと被葬者の関係について解説をしてきましたが、それらがどういった状態で出土したのか、また、古墳自体がどの



体験コーナー「土器のひみつをさがろう」

ような構造であり、人はどのように埋葬されていたのかという古墳の「墓」としての機能についてはあまり触れることがありませんでした。そこで、今回、展示室内に、市内の古墳の横穴式石室を原寸大で復元し、実際に中に入ってその大きさや構造を実感していただくとともに、棺や副葬品の配置、後期古墳特有の追葬の様子などを紹介する予定です。

とりわけ6世紀から7世紀にかけて築造された「後期古墳」は、市内の遺跡の中でも数が多く、見学できる形で保存されているものもあります。この体験コーナーをきっかけに、実際に身近な古墳を訪れることへも結び付けていただければと思います。



上城田寺長屋1号墳出土遺物〈古墳時代後期〉

【関連行事】

■講座「石器をつくろう（仮）」

講師：美濃考古学研究会 後藤信幸さん

日時：5月19日（土）午後1時～4時

■ワークショップ「ミニチュアの土器をつくろう」

協力：岐阜縄文土器クラブのみなさん

■ワークショップ「石のアクセサリー（まがたま）をつくろう」

■イベント「火おこしにちょうせん」

※詳しい日程、参加方法、定員等については、ポスター・チラシ・ホームページをご覧ください。

加藤栄三・東一記念美術館

制作の舞台裏から本画へつづる 所蔵作品展

2017.12.12(火)~2018.4.22(日)

当館は平成3年5月に開館して以来、本年度で26年目を迎えました。その間、栄三・東一両先生のご遺族はじめ多くの方々から作品のご寄贈をいただき、収蔵作品も3,829点となりました。

収蔵作品の中では素描（デッサン）が多くを占めており、日々の鍛錬の中で培った栄三・東一両先生のデッサン力は「素描の達人」として高い評価を受けており、素描はもちろん、ドローイングからも二人の卓越した描写力をうかがうことが出来ます。

このように多くの素描を描いたのは、本画（完成作品）を描くための取材として描き留めたからです。日本画は基底材である紙や絹、絵具の性質上、現場での制作には困難を窮めます。そのため、現場で描いたスケッチをもとにアトリエで構想を重ね、下絵を創り、下絵をもとに本画を描いていくという制作過程をたどります。

今回は、本画とともに本画を描くために描い

た素描・下絵を同時に展示し、1つの名画が出来上がっていく過程の中で、作家が試行錯誤を繰り返しながら辿り着いた本画の制作過程を鑑賞していただける企画展としました。

私たちが、美術館や画廊で鑑賞する作品は、そのほとんどが本画（完成作品）ですが、1つの作品が完成する裏には、多くの素描・下絵といった“おびただしい作品以前の作品”が隠されているということを本展覧会で今一度確認してください。



「水郷風景・潮来」 栄三

今回、昭和3年頃の作品で数少ない初期の栄三作品の中から昭和初期の風俗を描いた「水郷風景・潮来」を本画と下図を併せて展示します。この作品を描いた翌年、栄三は「夏日小景」で第10回帝展に初入選しています。

東一作品からは日本芸術院賞を受賞した代表作「女人」をスケッチとともに展示します。

「女人」は人間の業を描いたもので女性像を曼荼羅のように配置した作品です。この1点の本画を仕上げるために、画家は女性の裸婦スケッチを様々なポーズで100枚ほど描きました。描かれた数多くの裸婦スケッチから、画家の並々ならぬ意気込みと気迫を感じます。壁面の都合で裸婦スケッチの全てを展示することはできませんが、画家がいかにモチーフと真剣に対峙し格闘したか、その息づかいや眼差しを感じ取ってください。



「女人」（素描） 東一

特別展「レオナルド×ミケランジェロ展」を終えて

特別展「レオナルド×ミケランジェロ展」が、10月5日から11月23日まで開催され、会期中には約4万7千人の方がご来館されました。岐阜市と姉妹都市であるフィレンツェ市ゆかりの2大巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロ・ブオナローティの素描を中心とした作品を比較するという、日本では初めての展覧会でした。10月4日に行われた開場式には、来賓として大阪イタリア総領事マルコ・ロンバルディ氏、フィレンツェ市副市長クリスティーナ・ジャーキ氏、トリノ王立図書館ジョヴァンニ・サッカーニ氏、バッサーノ・ロマーノ教区長クレト・トゥデルティ神父、メタモルフォシ財団事務局長ヴィットリオ・ファウスティーニ氏をお迎えしたほか、フィレンツェ市経済団6名、また、4日、5日に当館で対話劇を上演したセッジョレ劇団員5名、カーサ・ブオナローティ、ヴェッキオ宮殿、ウフィツィ美術館などのクーリエ7名の方々など、イタリアから多数の関係者のご臨席を賜り、盛大に開催されました。

展覧会をご覧いただいた方には、「作品の制作過程、画家の興味対象の違いなどがわかってよかった」などの感想をいただき、二人の素描の魅力が十分に伝わった展覧会となりました。日本初公開となったミケランジェロの彫刻「十字架を持つキリスト《ジュスティーニアーニのキリスト》」も来館者の目を引き、神の如きと称されたミケランジェロの技を存分に堪能していただく機会となったと思います。また、フィレンツェ市からも日本初公開の作品「闘う騎士たち」を特別にご出品いただき、未完に終わった両巨匠の作品を感じることができました。

会期中の平日にはナイトツアー、11月からはライバル投票を行うなど、イベントも実施し、多くの方にご好評をいただきました。



開場式の様子

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌6ページで紹介した以外の分館展覧会は以下の通りです。

12月12日（火）～3月4日（日） メルヘンとロマンティシズム 野田龍二の世界

3月6日（火）～4月22日（日） Sweet woods 傍島幹司展

■特集展示（2階 総合展示内）■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

12月8日（金）～3月11日（日） 年中行事～受けつがれる祭り～

3月16日（金）～4月8日（日） れきはくの絵画

4月13日（金）～ 写真と資料で見る昭和の暮らし

■分室 原三溪記念室の展示■

1月4日（木）～2月2日（金） 三溪の見た岐阜・笠松のまちⅠ

2月3日（土）～3月2日（金） 三溪の見た岐阜・笠松のまちⅡ

3月3日（土）～ 三溪の絵と書

上記の日程は、都合により変更する場合もございます。ご了承ください。

***** 館 蔵 資 料 紹 介 *****

唐花象嵌鐙（吉田コレクション）

桃山時代 長さ30.5cm 高さ25.5cm

平成29年3月、甲冑研究者吉田幸平氏のご遺族から甲冑・兜を中心とするコレクションの寄贈をいただきました。そのうちの1領は以前資料紹介しましたが、吉田コレクションには火縄銃・弓・馬具・陣羽織・旗指物や軍記物などの文献、合戦絵図・絵巻なども含まれています。今回はその中から馬具のひとつを紹介します。



全 体

部 分

鐙は鞍から吊り下げて足をのせる部分です。古代の鐙は足の先端部だけをのせる形態でしたが、中世になるとこの資料のように底の部分が長くなって、足の踵までのせるようになります。

この鐙の足を入れる踏込と呼ばれる部分は木製で朱漆を塗っていますが、その他は鉄製で全面に唐花（想像上の植物）・蓮華唐草文・幾何学文などが描かれています。文様は鉄を彫り込んで、真鍮や銀をはめこむ象嵌という技法によるものです。象嵌は古墳時代には伝えられていた技法ですが、鐙に多用されるようになったのは桃山時代から江戸時代にかけてのことで、京都・加賀・尾張知多・会津などが産地として知られていました。

この鐙は銀の一部が剥落して見にくいのですが、「喜田村作」という銘があります（写真部分参照）。喜田村は京都に住して鐙などを制作した平安城象嵌と呼ばれるグループに属し、この鐙と同様「喜田村作」と銘された慶長19年（1614）の鐙も知られています。

利用の御案内

- 開館時間 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
- 休館日 毎週月曜日と祝日の翌日（月曜日が祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月28日～1月3日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

- 観覧料（団体は20人以上）
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上 300円（団体240円）
小中学生 150円（団体90円）
両館共通で観覧される場合
高校生以上 510円（団体410円）
小中学生 250円（団体150円）

◎下記の方は無料で観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

- ①岐阜市在住の70歳以上の人
- ②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、およびその介護

の方1人

- ③岐阜市内の小中学生
- ④家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の人と同伴する家族（高校生以上）の方
※企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。
※特別展は、その都度料金を定めます。

- 交通案内 JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより No.98 2018. 2

編集・発行 岐阜市歴史博物館

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

（分館）加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410